日ポ・サロン会報

日ポ・サロン会報　第23号
発行日　令和5年5月20日
事務局　日ポ・サロン
長岡　正
〒573-0084 枚方市香里ヶ丘6-14-6
TEL.072-852-2147
http://www.nipposalon.org/

風に憩うショパン像（ワジェンキ公園）

新たに歩みだす喜びと感謝

ポーランド留学生支援団体 日ポ・サロン代表
岸　本　啓　子

木々の若葉の美しさに心ときめき新学期が始まりました。皆様にはいかがお過ごしでございましたか?コロナ禍での行動制限が解かれつつの中で冬眠から目覚めて元気に活躍できますように祈りながら背筋を伸ばしています。会員の皆様には日頃から温かいご支援賜わりお礼申し上げます。有難うございます。今年度もご協力、ご支援を賜わりますようお願い申し上げます。ここ二年間は招聘留学生迎えることが出来ず残念なことでしたが、今年度は10月秋学期から神戸大学国際文化学研究科へ留学生を受け入れていただく手続きを進めています。留学生との交わりの中で友情学びは大いなる喜びです。

前日本学科学科長のエヴァ・パワシュ＝ルトコフスカ教授が「日本・ポーランド関係史」、両国の歴史をつぶさにえがききった大作を出版され「国家基本問題研究所　日本研究賞」を受賞されました。研究者の研究書と評価される内容です。今回、会報に一部掲載させていただきます。又、京都大学でのポーランド語を教えておられる佐々木ボグナ先生から講座について原稿を頂きました。ボグナ先生は京大大学院人間環境研究科で博士号を取得され、京大学術出版会から「宮沢賢治　現実の遠近法」を出されています。今回の会報はポーランドについて関心ある内容でじっくりご一読ください。私たちの行事活動も始めることができそうで、留学生、皆様とのお出会いは楽しみ、感謝でございます。心よりお待ちしております。

第９回　国家基本問題研究所　日本研究賞」記念講演　一部抜粋

日本とポーランドの百年史

エヴァ・パワシュ＝ルトコフスカ

日本のポーランドへの親近感始まりは１８８５年

ポーランドと日本の関係史主な段階を紹介したいと思います。

第一段階は、両国が公式な関係を締結した１９１９年より前、１９世紀の終わり頃に遡ります。その起源は感情、精神面と政治面にあると思います。精神面ではアイデンティティーの保護、伝統の尊重、勇気、家族に対する価値観を両国の人々は同じように理解していました。ポーランド人は、日本人が利己的個人主義を持たず、集団の利益のために自国に献身することに重きをおき、一方、日本人はポーランド人の持つ愛国心や母国への献身的な尊重の念を高く評価しました。

政治面では、歴史的に、アジア太平洋戦争勃発まで、ポ日両国は共通の隣国、帝政ロシア、そのあとソ連を抱えていました。

日本のポーランドへの親近感の始まりは１８８５年に遡ります。１８８５年東海散士は、政治小説『佳人之奇遇』のなかに、初めてポーランド民族の悲劇、すなわち国土分割や独立運動について記しました。１７９５年のロシア、プロシア、オーストリアによる第三次分割の結果、ポーランドは独立を失いました。東海は長年にわたり抑圧されてきたポーランド民族への連帯感を強調しながら、日本が開国してから世界の国々との付き合い始めるにあたって、巨大国の植民地化政策に対する警告を発していました。

１８９３年の落合直文『騎馬旅行』長編詩の一節、後年軍歌となった『波蘭懐古』のなかにも、ポーランドが描かれています。その動機となったのは、ベルリンからポーランドを経てウラジオストックまで、シベリア大陸横断旅行（1892～1893年）をした参謀本部の福島安正少佐のストーリーでした。福島は私の好きな主人公です。福島の主な目的は、ヨーロッパ諸国の近代的な軍備状況の調査、それも特に日本にとってもっとも危険な隣国・ロシアの調査でした。彼は占領国ロシアに対して長期にわたる抵抗運動の経験を持つポーランド人と接触し、ロシアについての情報を得ることに成功したようです。

大国ロシアを破った日本

福島の得た情報は、十数年後に起きた日露戦争（1904～05年）のときに活用されたようです。その当時ポーランドは３カ国によって分割されたため、ポーランド人はロシア軍をはじめ、それぞれの軍に徴兵されました。ロシア軍は多民族軍ですが、全てのポーランド人はロシア化を強いられ、ロシア語を喋らなければなりませんでした。

その戦争で日本人はポーランド人と接触しました。日本側にとっては、ポーランド人からの軍事情報とシベリア鉄道の破壊が大事でした。一方、ポーランド人は、この戦争をポーランドのために利用しようと試みていました。ポーランド人は、ピウスツキとドモフスキなどで、日本人は明石元二郎や宇都宮太郎などです。

ポーランド人の二人は、１９０４年に別々に日本に行きました。ピウスツキは、独立回復のためのポーランド人による武装蜂起やシベリア横断鉄道の反乱工作は、ロシア軍の弱体化に繋がり、日本人にとって大きなメリットがあると強調しました。なぜなら、ロシア軍は蜂起勃発を防ぐため、軍の一部をポーランドに駐屯させなければならなくなり、その分、極東の守備が手薄になるからでした。日本側にお願いしたいのは、補助金と武器の調達援助、ポーランド軍団の編成などでした。

ドモフスキは、蜂起はポーランド人に再び悲劇をもたらすだけで、日本にとっても無益だと警告しました。蜂起を起こすことより、ロシア軍のポーランド人の兵士を日本軍に投降、脱走させることは価値があると提案しました。

二人の政治に関する意見は異なるものの、ポーランド人兵士の脱走についてはピウスツキも同意見でした。

また、ポーランド人捕虜に対する特別な処遇などを求めることについても、ピウスツキとドモフスキの二人は同意見でした。日本全土における２９箇所の捕虜収容所に計七万人以上のロシア兵士の捕虜が収容され、その中に４，６００人以上のポーランド人の将校、兵卒、水兵はいたようです。ピウスツキとドモフスキは、ポーランド人を別個に収容してほしいと要望を出しました。四国の松山では、収容当初からポーランド人とロシア人の兵士を別々に収容していました。ポーランド人捕虜収容所は雲祥寺にありました。

結局、ピウスツキの使命は失敗に終わりました。ドモフスキの影響もあったけれども、日本とポーランドの協力関係に対する双方の目的が異なっていたのも要因でした。日本側は軍事情報とシベリア鉄道の破壊を要求しただけで、ポーランドの政治問題には全く関心がありませんでした。日本にとってポーランドは地政学的にあまりに遠く、国家としても存在しなかったのです。日本の政治的な目標は、ロシアの解体ではなく、極東におけるロシアの野望を制限することだけでした。

共同工作は成果がありませんでしたが、まさにそのとき、遠くて、しかも小さい、やっと国際舞台へ登場したばかりの日本という国が大国ロシアを打ち負かしたことは、ポーランド国民の中に日本人への深い親近感を植え付け、後の友好関係の源泉となったと思います。日本では１９世紀の終わり頃に、ポーランドではその十数年後に生まれた親近感は、その後の関係に影響を与えました。

日本軍とポーランド

赤穂浪士の墓前に花を捧げ
我が国民の感情を表明

日本とポーランドの関係の第二段階は、１９１９～１９４１年の公式関係です。第一次大戦後、１９１９年３月６日、日本政府がポーランドを独立国家として承認して以来、両国の関係は徐々に進展しました。ポーランドは独立を回復すると、１９２０年代は、新興国家として安定した国境線確定とヨーロッパ大陸内で地位強化に邁進していました。ポーランドにとって日本と友好関係を維持することは、東側隣国ロシアとの難しい関係を考える上で、適宜にバランスを取ることに繋がりました。

一方、日本は、１９２０年代に世界の諸問題を協議する国際連盟の主要国の一つとして大国の道を歩み始めました。国際協調ということを学び始め、極東地域での国益維持に気をはる日本は、自国に直接関連しない事項には介入せず、他の大国との対決姿勢を避けるように務めていました。しかしながらポーランドに関しては、概ね友好的な中立的な姿勢を示しました、

日本においては、文官よりは軍部がポーランドに強い関心を示していました。その証拠として、参謀本部の派遣で１９１９年からワルシャワにおいて活動していた山脇正隆中佐（後大将）の業績を上げることができます。山脇はポーランドを選んだ理由を３つあげました。

引用します。「第一に、その当時、ポーランドは日本社会のなかでまことに人気のある国だった。第二に、・・・ポーランド人は『背骨の真っ直ぐ』な、つまり正直な人間である。そして、最後に長期にわたる抑圧や長年にわたる占領者による民俗性撲滅政策にもかかわらず、自己の言語や文化を護りぬいた。これは教育や家族の有り方が基準にかなっているが故である。こどもたちは日本と同じように、両親を敬う」

山脇は、１９２１年に日本公使館が開設された後、初代の駐ポーランド日本公使館付武官に転任しました。これ以降、彼は戦間期を通して、ポ日関係に重要な役割を果たしました。直接には軍事面での協力、間接的には、特に３０年代の後半に、ポーランドに対する日本の認識に影響を及ぼしました。１９２０年のポーランンド・ソビエト戦争では、観戦武官として活動し、また、日本軍諜報将校はポーランドにおける暗号通信システムを学ぶよう進言しました。ヤン・コヴァレフスキ大尉が日本参謀本部に派遣された１９２３年に暗号解読の協力関係が始まり、３０年代には百名以上の士官・下士官が、研修、具体的な部隊の顧問などの目的でポーランドに派遣されました。

ポーランド孤児救援

両国関係に大変よい影響を与えたのは、シベリアのポーランド孤児救援でした。１９２０年から１９２２年まで数度にわたり、シベリアと満州から約八百名のポーランド孤児が日本赤十字社の難民救済事業で救命救助されました。１９１７年のロシア革命勃発後、内戦や列強の反革命支援、対ソ「シベリア出兵」などもあって政情が大きく乱れたときでした。そのため、アンナ・ビェルキェヴィッチとユゼフ・ヤクブキェヴィッチ等、ウラジオストック在住ポーランド人は、１９１９年にポーランド救済委員会を設立し、日本に支援を求めました。その結果、ポーランド孤児は日本行きの許可を得ました。

子供たちは敦賀経由で東京と大阪へ渡りました。敦賀、東京、大阪の各地で子供たちは非常に好意的

に迎えられました。貞明皇后陛下も、１９２１年の４月に東京の福田会という養護施設を訪れました。日本人はポーランドの子供たちを支援するために、多くの心づかいを熱心に寄せました。

ビェルキェヴィッチはポーランド人に関する情報をできるだけ多くの日本人に知ってもらおうと努力しました。彼女はポーランドの歴史の簡単な紹介やシベリアのポーランド人の状況などを、ポーランド語、英語、日本語の三ヵ国語で記載した『極東の叫び』という雑誌を発行し、それは東京、京都、大阪、神戸、横浜で販売されました。

シベリア孤児に寄せられた心づかいは、彼らの記憶に深く刻まれて、帰国後もずっとそれを忘れないでいました。その後、ポーランド極東青年会とシベリア協会を結成し、日本人の多大な厚意と感謝の念に応えるべく活動していました。彼らにとって日本滞在は忘れられない思いになったわけです。今でも福田会も敦賀も、シベリア孤児は忘れないまま、ポーランドと日本の関係のためにみんなすごく活動していらっしゃるんです。

駐日大使の泉岳寺参拝

１９３０年代は、満州事変などのため、欧米諸国は日本への批判を強めていましたが、ポーランド人と日本人との関係は一般的に変わりませんでした。国際政治で日本の立場が悪化するなか、日本は一層ポーランドへの関心を高めました。それに国際政治上、ソビエトの地位が強固になることは、日本にとっては危惧すべきことだったため、日本はポーランドを常に対ソビエト政策上の同盟国と見ていました。

日本とポーランド、両国間の友好関係を示すものとしては、３７年の１０月１日に公使館が大使館へ昇格されたことが挙げられます。初代の大使は、酒匂秀一とタデウシュ・ロメルとなりました。ポーランド側にとっては、ポーランドとドイツの関係で日本情勢が大事であり、日本側にとってはソビエトに関する情報が大事でした。また、３９年の８月２３日に、独ソ不可侵条約が締結されると、日本側はドイツのの裏切りとして受け取り、ドイツに関する情報も大事になりました。面白いのは、そのときにすぐロメル駐日ポーランド大使は、泉岳寺に参拝し、このように発言しました。

「心の命じるままに忠誠と信頼への誓いとして四十七士の赤穂浪士の墓前に花を捧げることにより、日本国民に我が国民の感情を表明したく思います。」

ポーランドと日本の関係は、第二次大戦勃発後も著しい変化は生じませんでした。日本政府は中立の立場でヨーロッパ戦争に参戦しないと公式に声明し、また、非公式に外相の有田八郎と松岡洋右はロメル大使に友好関係の維持を確証してきました。ドイツの同盟国だったのに、１９４１年の１０月まで東京におけるポーランド大使館が正式に活動していました。そのうえ、両国の諜報将校の協力関係は続いていました。日本人はヨーロッパにおける独ソの軍の動きに関する情報と引き換えに、ポーランドの諜報将校に対しドイツ、バルト諸国、スカンジナビアの日本公館において、日本の外交クーリエで、ポーランド人の報告書などを指定した目的地に送ると約束しました。ポーランドと日本の諜報員は、最初、１９４０年の半ばまでリガとカウナスにあって、その後はベルリン、プラハ、ケーニヒスベルグ、ストックホルム、ブカレスト、ソフィア、イスタンブール、バチカン、ローマ、満州でも活躍していました。

杉原千畝との関係

「命のビザ」で、３，４千人のポーランド人が救われた

第三段階は戦争です。ポ日関係が変わったのは、１９４１年の１０月４日でした。日本政府は駐日ポーランド大使館の閉鎖を決定しました。その理由は、同年の６月にドイツがソ連を攻撃し、３.９年の９月からソビエト支配下にあったポーランド東部を含むポーランド全土が占領下に置かれており、日本は大東亜進出をめざし、ドイツ、イタリアとの三国同盟の決定に基づいて、ヨーロッパにおけるドイツの政策を支援せざるを得なかったからです。でも、１０月４日に、ロメル大使と会った天羽英二外務次官は、ポーランド国民と日本国民との間に存するこれまでの友好的な関係を考慮し、日本政府はポーランド大使に対し、１０月末まで外交特権を付与し、全てのポーランド市民は日本に在留可能で、日本政府に庇護をしてもらえるということでした。

アジア・太平洋戦争が勃発後、１９４１年１２月１１日、ロンドンにあったポーランド亡命政府、とりわけ大統領は米英と同じように対日宣戦布告。しかし、ポーランドが一方的な対日宣戦の布告をしただけで、その通告を日本側は正式に受理していませんでした。理由は、日本政府が正式に亡命政府を承認しなかったからでしょう。

ポーランドと日本は正式な敵となりましたが、１９４５年まで諜報協力関係が継続していました。特に大事だったのは、３９年の１１月から４１年の８月末までの、カウナス領事館での杉原千畝副領事とレシェク・ダシュキェヴィチ中尉とアルフォンス・

ヤクビャニェツ大尉という陸軍諜報将校との関係でした。

先に申し上げたとおり、ソ連やドイツに関する情報の見返りに杉原は日本のクーリエを利用して、リトアニアから西側、すなわちポーランド亡命政府へ、または西側からカウナスやワルシャワへ、ポーランド地下組織や諜報機関の連絡物資を送ることを約束しました。杉原領事とポーランド諜報将校との協力関係は、ポーランド避難民への日本通過ビザでも結びついています。

第二次世界大戦が１９３９年９月１日に勃発すると、ドイツ軍はポーランド侵攻に入ります。１７日にソビエト軍はポーランドの東部国境を越えて、ヴィルノ（ヴィリニュス）を含む東部地方を占領しました。そこに駐屯していたポーランド軍部の一部は、リトアニア国境の収容所に抑留されました。やがて脱走が始まり、それにともない脱走者を援助するネットワークが構築されました。１０月の上旬に、ポーランドとの戦いが終わって、ポーランドの領土はドイツ軍とソビエト軍の占領下に入りました。そのために約４万人の軍人を含む避難民がリトアニア国境を越えました。１９４０年６月にソ連軍がリトアニアとラトビアに侵攻、８月にバルト三国を併合した後、日本政府はカウナスとリガにあった公館を閉鎖することになりました。難民の救助が急務となりました。

杉原千畝副領事の「命のビザ」のお陰で約３，４千人のポーランド系ユダヤ人とポーランド人の命が救われました。外交資料館の資料には杉原リストがあり、２，１３９名が載っているのですが、子供連れの大人もいたし、カウナスで杉原と協力していたポーランド人将校の手による偽ビザもあったため、実際には日本を経由して逃げたポーランド人の数はもっと多かったと思われます。

「スターリンの死」によって

第四段階は冷戦時代の非公式関係です（1945～1957年）。戦後の世界は、資本主義と共産主義という二つの陣営への分裂がより明確になりました。ヨーロッパの東西間の鉄のカーテンはますます深いものとなり、ポーランド、チェコスロバキア、ハンガリーなどの中欧諸国は、ソ連の支配下に入りました。アジアの分断も根深いものとなったため、アメリカの占領下にあった日本は１９４９年からアメリカの同盟国となっていきました。ポーランドと日本は反対側陣営に属したため、ポーランドはソ連とチェコスロバキアと共に、サンフランシスコ平和条約に署名しませんでした。しかし両国の間に如何なる否定的な要素もないため、日本に関して肯定的な発言をする政治家もいました。

両国の国交回復への気運が高まったのは、１９５３年のスターリンの死とフルシチョフのスターリン批判のお陰でした。５０年代半ばにすでに発展を見せ始めました。５５年の夏、「第５回世界青年学生フェスティバル」に日本から８６人が代表団としてワルシャワに来て参加しました。その年の秋には、参議院議員団がポーランドを初訪問し、また、ポーランドからの代表団が広島の原水爆禁止世界大会に参加しました。

５６年には、ポーランドと日本の労働組合員の交流が始まり、同年に森元治郎さんのお陰で東京で「日本ポーランド協会」が設立されました。

５４年にポーランド外務省は、日本と外交関係を結ぶのは極めて重要と判断。５６年には日本とソ連の間で外交関係の回復に関する共同宣言が署名されてからは、ポーランドと日本の交渉も増してきました。その結果、１９５７年の２月８日に署名された「日本国とポーランド人民共和国との間の国交回復に関する協定」により国交回復がなされました。

５月１８日、批准書の交換式のときに、日本側の代表、園田直特派大使はこう述べました。

「両国は、過去には心からの友情の絆により結ばれていた。その絆は第二次世界大戦の時期に引き裂かれ、そのことは両国にとって大きな損害をもたらした。我が国民と政府は、両国の友情が日本とポーランドの利益においてより緊密になることを確信している」。

天皇皇后両陛下の訪問

第５段階は冷戦時代の公式関係です（1957～1989年）。６０年代、７０年代には、両国の単なる政治体制にも拘わらず、両国の接触が少しずつ進展していました。

日本とポーランドの関係改善は、ポーランドが民主化に踏み出した９０年代に勢いを増しました。転機となったのは、１９９４年のノーベル平和賞を受賞したワレサ大統領の日本訪問であり、とりわけ重要なのは、２００２年の天皇皇后両陛下のポーランドご訪問でした。その時にはポーランドで最も古いワルシャワ大学日本学科の学生や教職員ともご会見されました。それは本当に重要な出来事でした。私はそのときに日本とポーランドの関係の簡単な展示会にご案内させていただきました。天皇皇后両陛下のご訪問の目的は、両国の友好親善を深めるもので、天皇皇后合両陛下を大歓迎する市民がポーランド人の日本人に対する深い親しみを表しました。

百年にわたる親近感

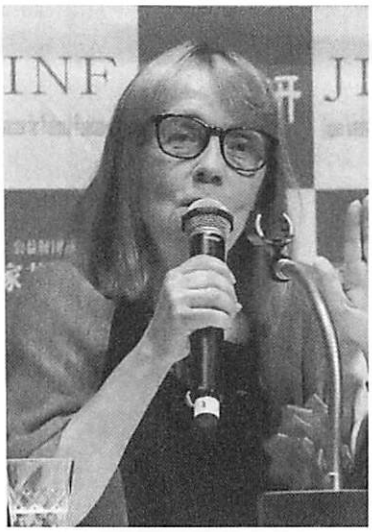
その後、日本とポーランドの関係がとても良好であるのは、私が聞き取り調査を行っている大使やその他の多くの人々から何度も聞いており、外交文書や報道資料からも明らかです。両国の利害が対立するような争点はなく、両国間の領土問題、戦争補償金、少数民族などの複雑な問題も全くなく、２１世紀の現在の政治、外交、経済、文化、学術などの協力関係は順調に発展しています。国際関係における重要な場面において、我々は近い立場にあり、国際機関や平和維持活動、イラク、アフガニスタン、中東などでの復興支援、テロとの戦い、環境保護などの分野で協力しています。今のウクライナにおけるひどい戦争をはじめ、国際的に重要な課題について、両国は近い立場にあります。

日本は経済大国として、またアジアの安全保障に貢献する国として、この地域におけるポーランドの主要なパートナー国の一つです。他方でポーランドは、安定性、ＥＵやヴィシュグラード諸国との結びつきの観点から、日本にとって中東地域における最も重要なパートナーだと思います。

両国の友好関係は、文化、学術分野にも及びますが、これは百年を超える両国民の間の伝統的な親近感、友好関係によるものです。１９２０年から２２年、および８１年から８３年にポーランド人が日本から受け取った人道支援、の本陣が大震災の１９９５年や２０１１年に受け取った人道支援は、その親近感の証拠です。

その他にも、ポーランドと日本において外交関係の締結百周年を記念して企画されたさまざまなイベントや、２０１９年６月の秋篠宮殿下ご夫妻のポーランド訪問もその根拠に数えられるでしょう。

百年以上前からポーランド人も日本人もお互いに親近感を覚えています。この親近感は、戦争と冷戦の期間を超えて、両国の社会のなかで綿々と受け継がれてきました。そのお陰で昔から両国の友好関係があり、友好関係のお陰で多くの分野における協力が発展しています。だからこそ、両国を隔てる距離と文化的な差異にも拘わらず、お互いに身近な国民なのだと思います。



著作ご案内

▼【増補改訂】日本・ポーランド関係史-1904-1945
(彩流社、2019)

日本・ポーランド関係史Ⅱ-1945-2019▲
(彩流社、2021)

佐々木ボグナ先生
(京都大学非常勤講師)

京都大学ポーランド語講座の覚書

毎年４月、新学期に伴い新しく出会う初級ポーランド語講座の学生たち。今年も、どのような学生が、何人ぐらい来るだろうか、と思いめぐらすこの季節に、皆さんにポーランド語を学ぶ学生の様子を紹介したいと思います。

京都大学におけるポーランド語の講座の経歴は２００９年に遡ります。それに先立って、その当時大阪にあったポーランド共和国名誉総領事館の故高島浩一様は秘書を公募した時にポーランド語が理解できる者が一人も現れず、調べたところでは、関西圏の大学にポーランド語学科が一校もなく、驚かれたのが一つのきっかけとなったようです。その後もポーランド語学科はいつか開かれるはずだと待っても叶うことがありませんでした。そして、高島和子様が、その長兄である高島浩一様に続いて２００２年名誉総領事を拝命し、２００９年に日本・ポーランド国交樹立９０周年記念事業としてポーランド語講座を設立する事を計画された様です。

最初の段階では、東京外国語大学の関口時正先生に相談することになり、京都大学の佐藤昭裕先生を紹介され、ポーランド語口座開設に向けての計画を推進されたことになりました。佐藤先生が京都大学教授会許可を通して下さる一方、なかなかポーランド語を教えられる先生が決まらず、ポーランドから帰国予定の森田耕司先生を待ち、漸く２０１０年４月９日に開講の運びとなった次第です。

開講式にはイガ・ロドビチポーランド大使閣下や松本紘京都大学総長をはじめとして、佐藤先生や名誉総領事の高島和子様、高島様の次兄である高島成光共英製鋼社長様、それに岸本啓子様、長岡正様などの日ポ・サロンの皆様が参加下さいました。私も、開会式に参加させていただき、その熱気の溢れる雰囲気は鮮明に記憶に残っています。その直後に実際に講座が始まり、ポーランド語の教育のみならず日ポの架け橋を作るという面でも新しい章が開かれたと言えます。

講座の当初は、森田先生と共に、その当時文学部で博士課程に所属していたポーランドのスタニャク・シルビアが勤めました。森田先生が導入された内容を、スタニャクさんは、ネーティブスピカーとして受講生の皆さんに練習させるという形式になったそうです。佐藤先生による、ご専門であるスラブ語の歴史言語学関連の講義も講座に通底する内容となっていたかと思います。その当時、講座は、日ポ・サロンの皆様にに加えて、学外の受講生が多く、どちらかというと一般的に考える語学講座の役割を大変よく果たしたようです。その頃からか、学期中の授業とは別に夏休みの間、集中講義という形で市民講座も開かれていました。現在、一般の方の参加が少なくなった半面、大学間の単位交換が可能になる大学コンソーシアム京都という制度のおかげで、ほとんど毎年、同志社大学や立命館大学など、京都大学以外の京都市内の大学生も授業に登録し、参加しています。新型コロナ禍の間、他大学の学生が京都大学のオンラインシステムが使えない関連で他大学の学生の受け入れが中止となりましたが、今年は再開される見込みです。

その後、森田先生は東京外語大の先生として転任され、スタニャクさんも帰国され、２０１２年の春から私がポーランド語講座の講師を受け継ぎました。その時に、すでに学外の受講生の割合が低くなっており、佐藤先生の助言で、日常会話などを学ぶ語学講座よりも、京都大学らしく、将来の研究者を育てる講座にしていこう、という形に変わっていきました。つまり、学生は文法をしっかり身につけ、なるべく早く辞書を引きながら自力で文章が読めるようになるという考えです。その後は佐藤先生が定年退職を迎えられ、中村唯史先生が新しく就任されました。中村先生ご自身は、ロシア文学専攻で、ポーランド語ができないようですが、ポーランド語講座をとても気にかけてくださり、ロシア語専攻の学生にもポーランド語講座を勧めていただいています。講座の経費は高島和子様とそのお兄様が寄付を継続していますが、今年も高島成光様に３００万円寄付していただいています。

現在は、初級コースと中級コース、それぞれ週一回ずつ授業を実施します。佐藤先生のお考えを受け継ぎ、初級コースでは、学生らは『ニューエクスプレス　ポーランド語』（現在『ニューエクスプレス　ポーランド語＋（プラス）』）に沿って、一年の間に基本的な文法を学びます。目指しているのはやはり、一年間のコースを終えてから、辞書を使いながら自分でポーランド語の文章を読めるようになることです。薄い教科書の割には知識が詰まっています。時にはその他の資料も参考にしながら、地味な勉強

になりますが、ポーランド語の基礎が身につく内容となっています。学生にもこのことを話していますが、ポーランド語というのは、スタートが難しい言葉だと思います。簡単な文章でも格変化や動詞の活用が問題になり、初期段階でも時間と労力を投資しない限り、日常レベルでもなかなか使えない類の言語になっていると言えます。しかしながら、一年間のコースを頑張った学生たちは、少し楽になるはずです。入口が簡単だけど学べば学ぶほど漢字の学習などで難しくなる日本語と正反対のように思います。

新学期の始まりには、初級コースの皆さんにこの授業に関心をもった動機を聞きます。言語的な興味のある学生はいつも最も多く見られますが、第二スラブ語としてポーランド語を学ぼうとするスラブ研究室の皆さんも来ているなか、今まで英語をひたすら習ってきてその他の言語をやってみたいという学生も多いです。一人の学生は「マイナーな言語を習ってみたい」と正直にいってくれたようです。その他にも様々な動機があります。数年の間、京都大学の民俗舞踊研究会というクラブの中では、ポーランドの踊りが好きな学生が多かったようで、授業にも大勢来ていました。昨年度も、久しぶりにそのクラブの一人が授業を受講しました。舞踊のように、何か別のことに集中しながら、ポーランド語がその手段になるというのはとてもよい状況だと思います。言葉の習得は速くなります。ポーランドに行ってみたいから、この授業を受けたという学生も新型コロナ禍になるまで一定数いました。会話の練習が少ないこの授業はそのような学生の期待に応えるかどうか難しいところもありますが、一つのきっかけになるのは確かです。世間の出来事も関心をもたせる例もあります。少し前に、ロベルト・レヴァンドフスキというポーランドのサッカー選手の人気が出始めた頃、その選手が好きでポーランド語をやってみたい、という学生が複数いました。また、昨年度、ウクライナでの戦争の関連でポーランドはよくニュースに出るようになったからか、例年より多くの学生が授業に来ました。珍しい動機として、私も忘れかけていた程、大昔に流行っていた戦争中のポーランドを舞台にしたドラマをどこかで観た学生が、字幕がないので、分かるようになりたいと言っていたことが記憶に残っています。

このように、様々な学生たちが初級コースにやってきて、その一部は文法の難しさに挫折しますが、また、半年か一年間の学習で、ポーランド語はこのような言葉だとわかりその程度で満足するグループもいます。一年間が物足りないという学生は、初級コースが出発点となり、その後に中級コースを受講します。

中級で学生たちは、ポーランド語学習の翼を広げるといいましょうか。初級コースと異なり、授業内容を受講生にお任せしています。初級コースと較べれば、当然ですが、学生はより具体的な関心をもち、自主的だという傾向が見られます。初級の知識を定着させるために、授業の一部を文法の練習に充てたほうがいいのではないか、と学生に勧め、ここ数年はこの形で授業を進めてきました。その場合は、初級の教科書とそれ程レベルは変わりませんか、今度はポーランド語のみの教科書に挑戦し、少しずつ練習を重ねています。文法の教科書も何冊か手元にあり、学生と相談しながら学習内容を決めます。授業のその他の時間は、学生が読みたいと選んできた文章を事前に配り、学生が予習してきたうえで、読解の練習をします。皆さんが提案するテキストは驚くほど実に様々です。それぞれの学生は興味があって将来研究課題ににしたい内容のものが多いようですが、時にはその難しさにも驚かされます。学習年数にも拘わらず、これがすぐ読みたいという学生の欲張りに限りがありません（笑）。今までは、児童文学の漫画という比較的にやさしいものを読む一方、先のポーランド語に触れたいということで、ブログや新聞記事の文章を読み、１９世紀の演劇や各時代の詩、また学術論文（分割時代のポーランドにおける行政を論じるものや、中世時代ポーランドと十字軍の条約を分析するもの、ポーランドにいる少数民族の言語学に関するもの、などのなかなか狭い分野のもの）も読んできました。教育学部から参加してきてポーランドの小学校の教科書を読んでみたいという学生がいれば、この作家のこの作品を原文で読みたいから受講したという学生もいました。私もつねに刺激が多く新しく学んだことが少なくないように思います。

新型コロナ禍は、言うまでもなく、新たな挑戦となりました。大学は一年間ほどオンライン学習のみということに切り替えて、複数の理由から学生がカメラをオフにしたままの授業をやらざる得ない状態でした。中級コースはそもそもほとんどの場合は、初級コースの続きの授業となり、面識のある学生です。また、人数も少ないのでやりやすかったと思います。

初級コースの方が、顔も見えないまま、勉強をはじめたばかりの学生をどのように授業に参加させるか、悩むところでした。授業用のプレゼンテーションに気晴らしコーナー」を設け、歌や写真など普段やらないようなことを、通常の勉強に加えて隔週にやりました。対面の授業より学生とのやりとりがだいぶ少ないため、表情も見られないので、授業内容をきちんと理解できているかどうかもよみにくいです。それぞれの先生は色々と工夫を考えたと思いますが、私の場合は、定期テストのやり方を完全に改めて、教科書の内容を全部オンラインクイズでとりまとめることにしました。一学期の内容がだいたい４０問ずつの５つのクイズになりましたが、そのクイズに、教科書を使いながらでも、何度も挑戦していいというルールで、定期試験を受ける条件は、練習を重ねて各クイズで７５％以上の正解率をとることでした。定期テストもオンラインになりましたが、教科書が使える余裕がないように、短めの時間を設定して、その中身はクイズから選んだ問題の組合せとなりました。よく練習してきた学生ほど、定期テストでよい結果が出せる仕組みでした。正直言って、そのような条件付きの定期テストの受験には、学生が抵抗を見せると心配もしていましたが、素直に受け入れてくれました。各クイズを５～６回練習した学生もいました。今でもそのクイズを補助的に使いますが、時代が変わるにつれて、このように新しい学習方法も使えるようになると気付かされるきっかけとなりました。これからも色々と新しい方法をさぐりながら、ポーランド語の学習をより楽しく効率的に進めることができればと思います。

京都大学のポーランド語講座から少し話がずれますが、ポーランドで活躍し日本人の女性と結婚しているチェコ人の監督Matej Bobrikは、２０１９年に、東京外国語大学でポーランド語の勉強をしている学生のことを描く『我々の小さなポーランド』（“Nasza mala Polska”）というドキュメンタリー映画を作りました。私はその映画を見る機会は得ていませんが、メディアの評論を見る限り、様々な動機でポーランド語学科に入学した日本の学生の大部分は大学卒業に近づくにつれて、現実の世界に直面して、自分の興味ある分野や夢を捨てて就職活動を始めます。やがて大企業などに勤めてポーランドと縁のない生活を送るという内容のようです。京都大学ポーランド語講座にも、そのような学生も時々います。留学の経験もありポーランド語で小説が読めるというレベルまでいっても、将来があまりにも不安定で、大学院にもいかず、就職する道を選んだ学生がいます。当然のこと、ポーランド語を学んでいる学生は全員研究者になれません。明るい将来が約束されていないにもかかわらず、研究の方を選び頑張っている学生もいます。それぞれ悩んだ結果出した結論なので、きっと正しいと思いますが、やはりとても残念だと思う時もあります。今後、ポーランド語はどうにか京都大学の正式講座として発展することが、高島様の願いだと伺っています。それに加えて、日本とポーランドの関係がさらに親密になり、数年かけてポーランド語を習得した学生たちは、両国のためにも、その能力を活かせる選択肢が増えることを願いながら締めくくりたいと思います。

関西在住日ポ・サロン後援留学生（2020年度）

マルチン・タタルチュク	京都大学文学部大学院現代文化学専攻
ヤヌシュ・ミトコ	京都大学文学研究科現代史学専修
トーマス・ディモフスキ	神戸大学国際文化学部

ポーランド留学生支援団体　日ポ・サロン

http://nipposalon.org/

ホームページには、会報第11号～第22号など、その他、諸事全般についても掲載しておりますので、是非ご一読ください。

＜ 会員のご逝去 ＞

吉富光江　様
伊吹澄子　様
大和田隆　様（役員事務局）
川端佳子　様（役員会計）

心よりご冥福をお祈りいたします

＜ 編集後記 ＞

2021、2022年度はコロナ禍で活動もできず、紙面総会で会員同士の交流の場がないまま残念なことでした。ウクライナへのロシア侵攻は収まらず胸痛みます。ポーランドの避難民受け入れには頭が下がります。一日も早い収束を平和平安の日が訪れることをお祈りしつつ。

事務局　岸本啓子